

☆被災地の歴史資料・文化財の保全、震災の経験の記録化と保存!!
 ★幅広いネットワークづくりを通じて、歴史・文化を復興に活かす!!
 ☆被災地から全国へ、歴史学と社会をめぐる普遍的な課題へ!!

史料ネット NEWS LETTER

第11号 1998年2月3日(火)

発行 歴史資料ネットワーク(神戸大学内)
 TEL078-881-1212(増4079), FAX078-803-0486

目次	
震災3周年を迎えて.....	1
被災史料の調査・整理・活用 各地で進む	2
埋蔵文化財をいかす	
住民とタイアップした取り組み.....	4
震災記録の発行/仮設住宅での	
聞き取りと資料収集.....	5
科学研究「被災史料保全活動からみた 都市社会の歴史意識に関する研究」.....	7
文献情報.....	7
イベント情報	
「武庫庄遺跡を考える」ほか.....	8
「News Letter」郵送購読受付のお知らせ.....	8

震災3周年を迎えて 史料ネット事務局長・藤田明良

先日、3回目の追悼式典が行われ、被災地は震災から4年目に入りました。三宮ビル街の再建率が7割に達し、表層の復興は進んでいるように見えますが、孤独死があとを絶たないように、地域社会の深層では、むしろ矛盾が拡大しているようにも感じます。

現在でも、史料の保全や寄託に関する相談は、ポツポツ寄せられています。新しい生活をどうするか、その問題に決着がついて初めて、古文書等のことが気にかかるようです。これは史料ネットの活動が、被災地で認知されてきたことのあらわれでもあります。一方、市場に流出した史料が、古書店の目録に目立ち始めました。中には、震災直後の巡回調査時に確認し、その後も所蔵家で保管されていたはずのモノまであって、胸がつかまります。

史料ネットでは現在、このような初期に救出したままの史料の手当てに取り組むとともに、これまでの活動を整理し、成果と問題・課題をクリアーにする総括作業を進めています。また埋蔵文化財問題では、新しいまちづくりが進展していく中で、埋蔵文化財を具体的にどのように生かしていくかという、復興の局面の展開にともなった新しい問題も持ち上がってきており、それへの対応として地域住民・行政との連携を深めつつ、学習会をもつなどの活動も進めています。

一方、震災記録保全を求める声は、4年目に入り高まっており、新聞等でも報道されるようになりました。しかしながら、民間資料をも含めた資料の保存という点で、自治体等の対応が遅れており、震災の基本資料そのものが失われつつあります。史料ネットは、保全を求める世論を高めるとともに、その保全を具体的に進める活動にも力を入れています。

史料ネットももうすぐ4年目を迎えますが、今後の活動や体制をどうすべきかについても、真剣な議論を始めています。阪神・淡路大震災が日本社会にとって未曾有の経験なら、ネットのような活動も歴史研究者にとって初めての経験です。今後どうあるべきなのか、率直な意見をお寄せいただければ幸いです。

史料ネット活動支援募金 (郵便振替)

名義 阪神大震災対策歴史学会連絡会 口座番号 01090-7-23009

被災史料の調査・整理・活用 各地で進む

震災後、被災史料救出保全活動に取り組んだ各団体が保全した被災史料の多くは、未だ調査・整理がなされることなく、地元の公的保存機関や所蔵者宅に保管されています。これらを歴史資料として研究に活用し、さらに住民自身によるまちづくりや地域文化に活かしていくうえでは、被災史料の調査・仮整理作業をすすめる、概要をあきらかにすることにより保存・活用の前提条件をつくっていくことが必要です。

被災地の史料保存機関のなかには、震災後大量の被災史料を受け入れている機関も少なくありません。さらに、この間の自治体財政悪化によるリストラの波にもさらされ、被災史料の調査・整理を十分進めるのが困難な状況です。史料ネットでは、これら機関への支援と同時に、体制整備への働きかけを続けています。さらに、民間所在史料を中心に、ネット独自の整理作業をも進めています。ここでは、この間の史料調査・整理・活用の取り組みについて報告します。

＜神戸大学保管史料＞

神戸市域では、地元自治体である神戸市が、一部の史料を除いて被災史料の受け入れに消極的であることから、救出・保全された史料のうち所蔵家で保管できないものの多くが、神戸大学文学部に仮保管されるか、または旧深江財産区が運営する神戸深江生活文化史料館に収蔵されています。

このうち、神戸大学文学部が仮保管している史料については、史料ネットのボランティアによる東灘区御影・山本家文書や同区森・藤本家文書の仮整理が続けられています。樽製造業経営史料で、この業種における阪神地域と木材産地の奈良地方のつながりを示す文書群である山本家文書の整理には、尼崎戦後史聞き取り研究会での情報交換のなかで、民俗学専攻のメンバーが新たに参加しています。また、森地区の区画整理事業に関する文書が含まれている藤本家文書については、都市計画専攻の神戸大学工学部生が調査に加わるなど、参加・協力の広がりが見られ、学際的な成果も期待されています。

＜公害関係資料の整理＞

また、史料ネット関連の地域プロジェクトのひとつである尼崎戦後史聞き取り研究会では、「尼崎公害患者・家族の会」資料の整理を開始しました。同研究会は現在、西淀川のあおぞら財団・公害地域再生センターによる市民研究助成を受けて、尼崎地域の公害史に関する調査・記録化に取り組んでおり、その一環として尼崎の患者会資料の整理作業をはじめたものです。同資料は震災により被災した患者会事務所から救出され、尼崎市立地域研究史料館に保管されており、この整理作業も同史料館に協力する形で進められています。現在まで、1997年11月29日（参加者4人）と1998年1月20日（5人）の2回にわたって作業を実施しました。

これらの作業と平行して、公害に関する聞き取り調査もはじまっており、研究会では今後、患者会や尼崎大気汚染訴訟原告団・弁護団などで作成・保管されている資料の保存・活用についても、各団体と連携して取り組んでいくことを検討しています。

阪神地域には、すでにあおぞら財団が資料室を設置して資料保存に着手している西淀川公害裁判をはじめ、尼崎大気汚染訴訟、国道43号線訴訟、大阪空港訴訟など、日本の公害・環境問題の歴史のうえでも重要な裁判が集中しています。係争中の裁判も、遠からず和解などの形で決着していくことが予想され、その後は、関連資料の全体的な保存・活用が課題となってくるでしょう。これらは、民間所在の古文書などの地方史料以上に、行政による公的保存になじまない現代の歴史資料であり、各団体や住民との連携のなかで、保存に取り組んでいくことが求められています。

＜新たな史料保全協力要請＞

さらに、史料ネットの活動の広がりのなかで、地域住民から新たな史料保全への協力要請も寄せられています。神戸市北区道場町連合自治会からは、地元で道場町連合自治会所蔵文書を保管・展示することへの協力が求められており、

これについては神戸女子大学で整理・目録化作業を行なうことになりました。また、神戸市須磨区在住の片岡陳正氏からは、片岡家（旧尼崎藩士）所蔵文書（近世中期～近代）の調査要請があり、1997年12月11日に調査を行ないました。この文書群は100～150点ほどで、内容は大まかに言って(1)幕末・維新期の尼崎藩（県）政に関わるもの、(2)主として明治期の、片岡家の家政に関わるもの、(3)関口流柔術・日置流弓術等の武術の秘伝書類に分けられることが判明しました。本文書については片岡氏からしかるべき機関への寄託・管理に委ねたいとの意志表示があり、内容の地域性から尼崎市立地域研究史料館と門戸厄神東光寺資料館の検分により、いずれこれら施設に移管される方向となっています。

＜明石の史料整理＞

田中源左衛門家文書 明石市内の旧家で、近世には明石藩西浦辺組の大庄屋をも務めた、田中源左衛門家文書の調査・仮整理がはじまりました。

同家は震災で被災し、家屋内の文書・書籍・美術品・民具などを、1995年3月と4月に阪神・淡路大震災被災文化財等救援委員会が中心となってレスキューしました。震災後の一連のレスキューのなかでも、対象が大規模かつ救援委、史料ネット、全史料協近畿部会など広範囲な参加によって実施されたものとして知られており、このうち文書類は、レスキュー時の仮リストから推定3千点以上と見られています。

今回この作業に着手したのは、現在のところ文化庁や県教委、明石市などによる整理の予定がなく、このままではせっかく保全した文書群が将来に渡って活用されることなく終わってしまう可能性があること、4月に第8回の「震災復興 歴史と文化を考える市民講座」を明石で開催するのを機会に、明石地域での歴史・文化保全を住民や行政とともに考えていく材料としていくこと、などを念頭においたものです。

作業の実施と参加者の感想・意見 作業は、史料ネットを中心に、明石文化財調査団有志や、全史料協近畿部会有志をはじめ文化財等救援委に加わった関係者の参加協力を得て実施しています。レスキュー時に現状記録が詳細に取られており、また田中家の配慮から救出時のままの状態が保たれているので、今回も、救出時の現

状記録を生かした仮整理を行なっています。

これまで、1997年11月30日と1998年1月31日の2回にわたって作業を実施し、参加者はそれぞれ13人と8人でした。作業終了後、感想と成果を語る反省会も持たれましたが、そこで出された感想・意見について、史料ネット側の責任者である大国正美氏の報告書から紹介します。

— ◆ — ◆ — ◆ — ◆ — ◆ — ◆ — ◆ — ◆ — ◆ —

＜大国正美氏作成「第1回田中源左衛門家文書調査報告書」より（一部編集・省略）＞

感想について 興味深い内容だった／絵図には興味深いものもある／（史料保存関係者からは）ボランティアでの調査に対し「自分たちはプロなのでプロとして関わりたい」という声があったことが紹介された。これに対して、「プロだからこそ、プロらしい仕事をしたい。それをボランティアとしてやるかどうか（報酬を受けてやるかどうか）は別ではないかと思う。研究者との交流、共同作業がもっと必要と考えており参加した。今後は行政への位置づけを求めるような動きをしてほしい」との発言があった。

この点に関しては奥村、大国から、4月に明石で行う市民講座は教育委員会への働きかけをしていくこと、外の自治体では行政と連携して予算の増額を果たしているところもあること、史料整理は本来、行政が行うべきだが、行政に整理を働きかけても動かないケースなど、史料ネットとしても救出した史料をいつまでも放置できず、最低限の仮目録までは作成しなければ、レスキューした史料が生きないと考えている。明石市はこれまで被災史料の保全に独自にはあまり対応してこなかった自治体だが、田中家のレスキューを教育委員会発行の文化財年報に掲載するなど、変化しつつあるのではないかと、基本スタンスを説明したが、史料ネットと（史料保存関係者の）認識の一致に努力が必要か。

— ◆ — ◆ — ◆ — ◆ — ◆ — ◆ — ◆ — ◆ — ◆ —

田中家文書整理の第3回は、2月28（土）に実施する予定です。参加希望者は、史料ネットセンター（TEL 078-881-1212、内線4079）までお問い合わせください。

（文責・辻川敦）

埋蔵文化財をいかす 住民とタイアップした取り組み

＜「猪名荘遺跡を学ぶ会」学習会の開催＞

去る1997年11月29日、尼崎市潮江公民館で、地元潮江の住民の方々によって構成される「猪名荘遺跡を学ぶ会」が主催する学習会が、史料ネットも協力するかたちで行なわれた。参加者は60名をこえ、会場も満員になる盛会で、講師には、大阪女子大の田中文英氏、兵庫県埋蔵文化財調査事務所の渡辺昇氏、尼崎市文化財収蔵庫の岡田務氏という顔ぶれがそろった。このように、大学や、県・市という行政に身をおく研究者と、在野の研究者とが意見交換しつつ、地元の住民・市民とともに猪名荘遺跡に対する認識を深め、その歴史的意義を確認していく場を設けることができたことじたい、有意義なことであったと思う。さらに、学習会のなかで、公開された墨書土器のひとつに見える文言について、「西庄」と読める可能性が参加者による意見交換のなかで指摘されたことは、この遺跡がまさしく東大寺「猪名荘」の跡であることを確証していくうえで、大きな一歩を踏み込んだものであったといえる。

このように、全体としてこの学習会は成功であったといえると思う。しかし、学習会の後、「学ぶ会」世話役の方々との間でもたれた反省会では、今回の学習会はまずは遺跡についての認識を深めるというねらいであったにせよ、「新しい潮江のまちづくりに猪名荘遺跡を生かす」という、「学ぶ会」を立ち上げた本来の趣旨にもう少し近づけた内容であってもよかったのではないかという意見が出された。さらに、講師の話の内容についても、少し専門的で高度すぎたのではないか、話の時間も長かったのではないかと声もあった。また、参加者の構成について、周辺地域の市民の方々に比べて地元潮江の住民の方々が以外に少なかったのではないか、との指摘もあり、この点も今後「学ぶ会」の活動を続けていくうえで考えていかねばならない問題であろうと思われる。

(文責・井上勝博)

地域住民の立場から

学習会を終えて

川本ミハル(潮江在住)

もう20年にもなりましょうか、あの古地図「東大寺領猪名庄絵図」に出会ってから(もちろん実物ではありませんが)私は第二のふるさとなった潮江が好きになりました。ドブ川となった水路や道端の石までが歴史を刻み、遠い昔の人々のくらしの跡が残っているような気がしてきたのです。

駅前再開発事業が進むなか、遺跡が発見されたというニュースは、やっぱり! うれしく飛び上がる思いでした。昨春、公民館主催の講座で、鎌倉時代の武家屋敷の遺跡を見、現地説明会では奈良時代の建物跡を見ることができました。大きな柱の穴が整然と並んでいます。縦横4つずつ、計16の穴が1棟、北側に同じようなものがもう1棟あります。倉庫だということです。これを見た時、1200年以上も前に、この地に人びとが営々と米づくりをし、くらしを立てていたことと、今同じ地につつましく暮らしている私たちとが1本の糸で繋がっている実感に胸がふるえました。

再開発工事が進み、夏には遺跡は土の中に埋まってしまいました。そんな折り、猪名荘遺跡を学びませんか? とお誘いがあったのです。一も二もなく大賛成で、世話人をかけて出、11月の学習会を待ちわびておりました。歴史資料ネットワークのご苦勞により、また市の地域研究史料館や文化財収蔵庫の協力があって、大阪女子大・田中文英先生(地域研究史料館専門委員)からは「猪名荘の歴史について」というテーマで歴史的な流れと意義を、県・埋蔵文化財調査事務所の渡辺氏と市・文化財収蔵庫の岡田氏からは発掘調査の成果について、スライドや須恵器・土師器の現物を見ながらの説明を受けました。潮江公民館のホールいっぱい集まった人たちは興味深く話に聞き入り、また10数点の土器を目のあたりにして静かながら興奮状態の中にいました。当地は昭和59年に猪名荘遺跡と決

まり、平成元年から何度もの試掘をしながら何も出てこなかった由、関係者の苦勞と、喜びもひとしおだったでしょう。私も以前から切れぎれに聞いており、このたびの発見は「やった！」と思ったことでした。ご苦勞に頭が下がります。

猪名荘遺跡は実際にあった、これは地域住民としても尼崎市民としても大きな財産です。これを守っていききたい、次代につなげていききたい、少しでも形あるものを残していききたいとの思いが強まりました。後日、地元世話人で反省会をもちました。「歴史的なことから、発掘現場からの話を両方聞けてイメージが広がり、判りやすく、たいへん有意義であった」という意見の他に、「長時間で疲れた人もいた。2～3時間以内でできないものか」「言葉が難しかった」「地元の人の参加が少なくて残念だった」「遺

物がいつも市民が見れるよう展示してほしい」などの声がありました。地元「学ぶ会」はまだまだ弱体ですが、少しずつ歩んでいこうと思います。当日、お話をいただいた先生がた、史料ネット、市の関係者の皆様に感謝いたします。

— ◆ — ◆ — ◆ — ◆ — ◆ — ◆ — ◆ —

猪名荘遺跡を学ぶ会の第2回学習会は、第1回に参加した富山大学人文学部・鈴木景二氏の協力により、3月に開催される予定です。

また、今回と同様、市民とタイアップした企画として、2月21日に「武庫庄遺跡を考える」と題する講演会を、震災被災地での文化活動に取り組む「フェニックス・ステーション難波」と史料ネットの共催により開催することになりました。くわしくは本ニュース8頁のイベント情報欄をご覧ください。

震災記録の発行／仮設住宅での聞き取りと資料収集

<自治体による震災記録の発行>

この間、川西市と尼崎市によるそれぞれの震災記録が発行されました。

『阪神・淡路大震災川西市の記録 私たちは忘れない』兵庫県南部地震川西市災害対策本部編 1997年3月川西市発行 250頁

『阪神・淡路大震災 尼崎市の記録』財団法人あまがさき未来協会編 1998年1月尼崎市発行 460頁

これにより、すでに同様の記録が発行されている兵庫県、明石市、神戸市、芦屋市、西宮市、宝塚市、大阪府、箕面市と、被災自治体の震災記録が一応出そろったこととなります（兵庫県と神戸市は編年形式の記録を継続発行予定）。上記以外の被災自治体では、現在のところ特に本格的な記録作成の予定はないようです。

ではこれらの震災記録によって、各地域の被災と復興の状況が十分記録されたのでしょうか。それぞれの内容を検討してみると、決してそうは言えないというのが実情です。一例として、最近刊行され内容も比較的詳細な、尼崎市の記録を見てみることにしましょう。

1995年中から庁内震災資料の調査と保存に着手した尼崎市では、1996年6月には助役を委員

長とする全庁的な編集委員会を組織して原稿作成を開始しました。自治体史編さんや史料保存に豊富な経験を有する芝村篤樹氏（桃山学院大学経済学部）を専門研究員として委嘱し、指導・助言をおおぐなど、与えられた条件のなかでは出来得る限りの体制をとったと言えます。

同市が編さん事業の基本としたのは、記録性を重んじて客観的データを重視すること、行政としての反省点や課題の記述にも力点を置くこと、行政の記録にとどまらず民間の動きや市民の体験・声なども収録していくこと、などの諸点でした。実際に刊行された記録誌は、行政サイドから見た網羅性と記録性という点では比較的充実したものとなっています。また、「反省」「意見」「体験」といったコラム風の欄を随所に設けて、行政としては記述しにくい内容もあえて盛り込むなど、努力のあとが見られます。

しかしながら、反省点や課題の記述が、行政の取り組みの客観的な総括と教訓抽出にまで至っているかと言うと、残念ながらまだまだ不十分と言わざるを得ません。さらに、民間の動きや市民の体験なども一部収録されているものの、市民にとっての震災と復興の全容が描かれているとは言えません。総じて、現時点での行政の記録にとどまっていると言えるでしょう。

一方、震災資料の保存については、尼崎市の場合は各部局の保管資料の把握に務めており、今後の保存にも留意するよう指示されているため、現在のところ比較的残されているようです。しかし、これらの資料を今後どう保存・活用していくかについては、未だ方針が決まっておらず課題となっています。さらには、民間記録や資料も含めた震災資料全般の保存は、地域研究史料館や図書館が部分的に取り組んでいるとは言え、市域を網羅する水準には至っていません。

こういった記録誌の評価ないし資料保存の状況は、他の自治体もおおむね同様であると考えられます。つまり、網羅的な震災資料の保存と記録化という点では、むしろ今後の取り組みが重要であるということです。こうしたなかでひとつの鍵を握っているのが、現在21世紀ひょうご創造協会が実施している被災地での避難所資料調査の継続と、その成果の地元との共有化でしょう。創造協会による避難所資料調査は、当初は収集を目的としていたのが、資料の性格から次第に所在調査に重点を移しつつあるということであり、そこで確認された資料をどう保存していくかという点で、地元自治体などとの連携が不可欠であると思われるからです。

この点、阪神間の被災自治体のいくつかは、市史編さんを計画していることが注目されます。具体的に着手しているのは明石市・西宮市・尼崎市・池田市・豊中市で、さらに伊丹市が検討を開始しています。これらの自治体はいずれも既に一度市史を刊行しており、二回目の市史ということで、おそらく例外なく現代編が大きな柱となることでしょう。そしてそこでは、阪神地域の現代史にとっての歴史的事件である震災が大きなウェートを占めると予想されます。

こうして見れば、被災市の現代史編さんを一つの軸として、連携した震災資料保存と記録化の取り組みを組織するとともに、21世紀ひょうご創造協会による避難所資料調査をボランティア団体や仮設住宅、まちづくり協議会など民間資料全般に拡大し、その成果を各市史編さんと共有して保存につなげていくことも考えられます。さらには、学際的研究と連携した大きなネットワークをつくり、現在県が検討している県立公文書館プランともリンクさせていくことも考える必要があるでしょう。史料ネットは、21世紀ひょうご創造協会や震災記録を残すライブ

ラリアン・ネットワークなどと連携しながら、引き続きこの課題に取り組んでいきます。

＜蓬川仮設住宅を訪問して＞

大きな話も、小さなところから実践しなければ意味がない...というわけで、まず被災者の皆さんの体験をお聞きするべく、震災3周年の1998年1月17日に尼崎市の蓬川仮設住宅で催された、体験を語る会に参加しました。訪れたメンバーは、奥村弘・寺田匡宏（史料ネット）、佐々木和子（21世紀ひょうご創造協会囑託）、辻川敦（尼崎市立地域研究史料館）でした。

当日は、警察や消防、市など、蓬川仮設に関わった各機関からの挨拶と、住民数人の体験が短く語られ、黙祷ののちビールを空けての歓談となりました。そこで、同ふれあいセンター会長の土井新太郎氏と、尼崎で被災者支援ボランティア活動を続けるNPOシンフォニーの代表・山崎勲氏から、さまざまな話をお聞きすることができました。その内容は、訪問した4人にとって、大いに考えさせられるものでした。

震災で人生が変わったという土井氏は、避難所以来のリーダーであり、自治会運営や行政との交渉の必要性から、通知文や会計記録をはじめ、資料をかなり網羅的に保存されているということでした。また山崎氏が述べられるのは、仮設の実態や行政の対応（末端職員が、被災者の実情に応じて、あるいは声に押されて、良い意味でも悪い意味でもいかに柔軟に対応したか、などなど）は、公式記録に載っているようなものではない。公式の記録はそれはそれで良いから、そこに現れない事実を、体験のレベルからぜひ聞き取りによって記録していただきたい、ということでした。また、仮設住宅が都市のなかに生まれた一種の村とも言える存在であり、焼き肉ガーデンパーティとつかみ合いのけんかから始まった被災者の自治と助け合いの生活は、仮設の解消とともに消えていくのか、あるいは何らかの形で今後を受け継がれていくのかわからないが、現代の都市における住民自治と民主主義を考えていくうえできわめて貴重な経験なのではないか、ぜひ史料ネットに記録化と歴史的評価をしてもらいたい、それには全面的に協力したい、ということも強調されました。

この要請を受けて、2月1日には同じメンバーが再び蓬川仮設を訪問し、土井氏保管資料の

概要調査と、仮設自治会運営の経験を中心とした聞き取りを行ないました。この調査は今後も継続し、他の仮設住宅へも対象を拡げていきたいと考えています。対象が膨大なうえ、できれば仮設解消前に現地の雰囲気の中かで調査を行

なうことが望ましく、調査への多くの参加が望まれます。なお、この2月1日の訪問調査の様子は、NHK神戸放送局が取材し、2日夕刻のニュースで放映されました。（文責・辻川敦）

科学研究「被災史料保全活動からみた
都市社会の歴史意識に関する研究」

＜科学研究全体の取り組み状況＞

(1) 研究組織会議 第3回目の研究組織会議が、1997年10月10日に神戸市灘区六甲道の勤労市民センターで開かれた。科研では、歴史資料保全活動の総括を課題の一つに掲げているが、その作業に資するため、佐賀朝氏および馬場義弘が、史料ネット総括集の企画とその概要について説明した。

(2) 研究プロジェクト 科研では、複数の研究プロジェクトを発足させることになった。とりあえず以下の3プロジェクトが立ち上がった。

A) 被災地の都市社会形成・災害と歴史意識
(幹事：高橋昌明・藤田明良・坂江渉)

第1回 1997年12月27・28日（於、淡路島）

内容：学習会 テキストは神木哲男・崎山昌広編『歴史海道のターミナル』

（神戸新聞総合出版センター、1996年）

北淡町歴史民俗資料館訪問

B) 戦後の史料保存運動（幹事：塚田孝・佐賀朝）→佐賀報告参照

C) 震災資料の保存問題（幹事：芝村篤樹・奥村弘）

第1回予定 2月19日（於、兵庫県民会館）

(3) 成果 坂江渉氏が科研の研究成果として「歴史研究と市民の歴史意識－被災地神戸での歴史資料の救済・保存活動を通じて－」

（『記録と史料』第8号、全国歴史資料保存利用機関連絡協議会編集・発行、1997年10月）を発表した。（文責・馬場義弘）

＜「戦後史料保存運動史学習会」の取り組み＞

史料ネットの活動報告書をまとめるにあたっては、その活動の歴史的位置付けについても議論し、まとめていく必要があります。そこで、我々の活動経験を、戦後の史料保存運動や歴史科学運動の中で取り組まれ、議論され、積み重ねられてきたものと突き合わせて、客観化する作業を行なっていくため、読書会形式で進める学習会を設置しました。

学習会は、史料ネット運営委員、科研費研究会メンバー、大阪歴科協委員などが参加して進められ、現在までに3回（11月13日、12月18日、1月29日）を開催しました（毎回10～15人参加）。

内容は、現在のところ、1950年代前半の国民的歴史学運動についての検討から出発して、埋蔵文化財の保存運動の歴史にそって、平城宮跡、難波の宮などの保存運動について学習し、議論しています。具体的な議論については、追って紹介していきたいと考えていますが、これまでは、①埋文と歴史資料での保存問題・保存運動の共通点と相違点、②保存運動と各段階での研究の進展との関係、③保存運動と地元住民との関係、などが主要な論点になっています。

この学習会は、史料ネットの活動報告書にその成果を生かすだけでなく、そこでの論点をめぐって歴史学と史料保存についての議論を深める場にしていき、また、どこかの段階で広く議論する機会として企画化することも考えています。（文責・佐賀朝）

■文責・馬場義弘

全国歴史資料保存利用機関連絡協議会『記録と史料』第8号 1997年10月

特集／阪神淡路大震災と記録づくり 以下の諸論考が掲載されています。

宮本博「阪神・淡路大震災記録資料を未来に伝える－震災記録を残すライブ・ライオン・ネットワーク－」／佐々木和子「兵庫県の震災資料保存活動と今後の課題」／貝塚健「全国美術館会議の『報告』に書か

れていないこと」／鳥野茂治「『阪神・淡路大震災にかかわる史料保存活動の記録』を通じての
一考察一近畿圏の史料保存活動を取りまく環境について」／坂江渉「歴史研究と市民の歴史意
識一被災地神戸での歴史資料の救済・保存活動を通じて」／辻川敦「阪神・淡路大震災による
文書等所蔵施設の被害調査」／伊藤然「史料防災文献目録について」／片岡法子「地域の課題と
資料の保存一公害地域再生の取り組みから」／大崎正雄「『神戸の歴史を守る会』について」
／木村修二「宝塚の古文書を読む会」

八木滋「和田正直氏文書調査雑感」『市史研究紀要たからづか』第14号 1997年10月

佐賀朝「歴史資料ネットワークの活動の現状と課題」『歴史評論』第572号 1997年12月

森下徹「『尼崎戦後史聞き取り研究会』について」同前

松下正和「第七回歴史と文化を考える市民講座」参加記『地方史研究』第270号(47-6)1997年12月 遠藤

明子「あおぞら財団と『西淀川の震災展』」『日本史研究』第425号 1998年1月

■ イベント情報

—— 国内最大級の柱跡出土で話題の遺跡!!

武庫庄遺跡を考える

日時：1998年2月21日(土) 午後1時30分～4時

会場：尼崎市女性センター・トレビエ(阪急武庫之荘駅下車、南へ徒歩5分
尼崎市南武庫之荘3-36-1、TEL 06-436-6331)

報告：長山雅一氏(流通科学大学教授)

「弥生時代のクニと武庫庄遺跡」

ライブ解説：岡田 務氏(尼崎市文化財収蔵庫)

参加：どなたでも自由にご参加ください。参加料500円。

主催：フェニックス・ステーション難波

〒660-0892 尼崎市東難波町3-21-35 TEL/FAX 06-483-2329

共催：歴史資料ネットワーク

◇尼崎戦後史聞き取り研究会例会

1998年2月25日(水)午後6時30分 於尼崎市立地域研究史料館(尼崎市総合文化センター7階)

内容「大阪日本橋改良住宅での聞き取り経験から」 報告者・佐賀朝氏

月1回の例会のほか、尼崎公害患者会資料の整理も行なっています。

参加申し込み・お問い合わせは、地域研究史料館まで(Tel 06-482-5246、FAX 06-482-5244)

◆第8回「震災復興 歴史と文化を考える市民講座」

1998年4月12日(日)に明石市サンピアで開催予定。詳細は次号でお知らせします。乞うご期待!!

■ “News Letter” 郵送購読受付のお知らせ

本“News Letter”の郵送購読申込みを受け付けています。年間(4号分)送料500円。ご希望の方は、下記史料ネット事務局までお申し込みください。

史料ネット NEWS LETTER No. 11 1998.2.3(火)

編集・発行 歴史資料ネットワーク 〒657-8501 神戸市灘区六甲台町1-1

神戸大学文学部内 TEL.078-881-1212(内線4079)

FAX.078-803-0486 e-mail yfujita@lit.kobe-u.ac.jp